

梁・昭明太子蕭統「陶淵明集序」訳注稿（一）

はじめに

陶淵明といえは今でこそ中国文学を代表する詩人の一人であるが、彼の生きた時代、また、死後数百年間は彼の文学はそれほど重んじられていなかった。

その中において、梁・昭明太子蕭統は大いに陶淵明への傾倒振りを示す。彼は陶淵明の集を編纂し、序文を書き、伝記も書いている。序の中の「陶淵明の詩 篇篇 酒有るを疑ふもの有り」、「余 其の文を愛嗜し、手を積く能はず。尚ほ其の徳を想ひ、時を同じうせざるを恨む」、「白璧の微瑕は、惟だ閑情の一賦に在るのみ。……惜しいかな。是れ亡くんば可なり」などの発言は、太子の陶淵明評であり、淵明への敬慕を表わすものとしてよく知られている。特に「閑情の賦」に対する「これはない方がよい」などという発言は強烈な印象を与える。また「白璧の微瑕云々」は、太子の文学観をも表す箇所として知られている。

昭明太子の「陶淵明集序」、或いは昭明太子の陶淵明観と言えは、前にあげた発言がすぐに思い浮かぶのであるが、序全体はあまり知られていないように思う。前の発言は重要であるが、やはり昭明太子の陶淵明観を考える時、序全体をみてもみる必要があるであろう。そのようなことを考え、訳注を試みることにした。なお、訳注にあたっては陶淵明の作品の語彙・表現に注意するのはもちろんだが、昭明太子というところで『文選』所収の作品の語彙・表現にも注意していくつもりである。なお、『文選』

梁・昭明太子蕭統「陶淵明集序」訳注稿（一）

には李善注をも含む。

〔注〕「陶淵明伝」のこと。四部叢刊『梁昭明太子文集』、四部備要『梁昭明太子文集』には収録しない。「陶淵明伝」の訳は、平凡社・中国古典文学大系『漢・魏・六朝・唐・宋散文選』（一海知義氏訳）、角川書店・鑑賞中国の古典『陶淵明』（釜谷武志氏訳）、岩波文庫『陶淵明全集・上』（松枝茂夫・和田武司両氏訳注）を参照されたい。

武井満幹

凡例

- 一、四部叢刊『箋註陶淵明集』の巻頭に載せるものを底本とし、これと『昭明太子集』所収のものと校勘した。校勘材料は次の通りである。
 - 四部叢刊『梁昭明太子文集』巻四（以下、「叢刊本」と略す）
 - 四部備要『梁昭明太子文集』巻四（以下、「備要本」と略す）
 - 四庫全書『昭明太子集』巻五（以下、「四庫本」と略す）
 - 漢魏六朝百三名家集『梁昭明太子集』（以下、「百三名家集本」と略す）
 - 『梁文紀』巻五「昭明太子統」（以下、「梁文紀」と略す）文字の異同は、先に【校勘】としてあげ、重要なものについては【語釈】においても取り上げた。なお、異体字や俗字は校勘の対象としない。
- 二、参考にした注釈書は以下の通りである。
 - 熊永謙『魏晉南北朝駢文選注』（貴州人民出版社・一九八六年）

○穆克宏・郭丹『魏晉南北朝文論全編』（江蘇教育出版社・一九九六年）

○高步瀛『南北朝文學要（上）』（中華書局・一九九八年）

○兪紹初『昭明太子集校注』（中州古籍出版社・二〇〇一年）

○溫洪壽『新詠陶淵明集』（三民書局・二〇〇二年）

なお、穆克宏・郭丹両氏と高步瀛氏は『昭明太子集』を底本とし、兪紹初氏と溫洪壽氏は『箋註陶淵明集』を底本とする。熊永謙氏の底本は不明。

訓読については『和刻本漢詩集成』第十七輯（汲古書院・一九七七年）所収の『陶靖節集』に付された訓点を参照した。

ほかに、福井佳夫「序の文体について——六朝の別集序を中心に——」（『文学部紀要』第二十五卷第二号・中京大学文学部・一九九〇年）には、訓読（一部省略）と大意を述べているので、これをも参照した。

三、【語釈】の用例中、陶淵明の作品の引用は陶澍『靖節先生集』に拠る。

四、漢字は、原則として新字体を使用した。書き下し文および読み仮名には旧仮名遣いを用いた。

五、高步瀛氏は四段に分ける。それに従い、本訳注稿も四段に分け、段ごとに校勘・訳注・和訳を施した。

陶淵明集序

※ 百三家集本は「陶靖節集序」と題す。「靖節」は陶淵明の贈り名。顔延之「陶徵士誄」（『文選』巻五十七）に「其の寛樂令終之美、好廉克己の操の若きは、論典に合ふ有り、前志に愆ふ無し。故に諸もろの友好に詢りて、宜しく論して靖節徵士と曰ふべし（若其寛樂令終之美、好廉克己之操、有合論典、無愆前志。故詢諸友好、宜論曰靖節徵士）」とある。李善注は「論法」「寛樂にして終りを令くするを靖と曰ひ、廉を好みて自ら克つを節と曰ふ（寛樂令終曰靖、好廉自克曰節）」を引く。

「陶淵明集序」の制作時期は不明。橋川時雄『陶集版本源流考』（『文字同盟』第三卷所収・汲古書院・一九九三年）によれば、氏の見た陶淵明集旧抄本の昭明太子序の末に「梁（※原作「梁」——引用者注）大通丁未年夏季六月昭明太子蕭統撰」と書かれてあったという。氏は基づくものが不明であるから、太子が集を編纂した年月は不明であると述べる（余所見之旧鈔陶集、昭明陶集序末記云、梁大通丁未年夏季六月昭明太子蕭統撰。未詳其所本、則昭明編陶、未詳其年月也）。大通丁未年は、大通元年で西暦五二七年。ちなみに太子は中大通三年（五三二）に生涯を終えている。

【本文】

夫自術自媒者、士女之醜行。不忤不求者、明達之用心。是以聖人韜光、賢人遁世。其故何也。含德之至、莫踰於道、親己之切、無重於身。故道存而身安、道亡而身害。処百齡之内、居一世之中、倏忽比之白駒、寄寓謂之逆旅。宜乎、与大塊而盈虛、隨中和而任放。豈能戚戚勞於憂畏、汲汲役於人間。

【校勘】

- 一「媒」、叢刊本作「謀」。梁文紀注云一作謀。
- 二「伎」、叢刊本・備要本注云俊改。
- 三「寓」、原作「遇」。今批叢刊本・備要本・四庫本・梁文紀作「寓」改。
- 四「盈虛」、叢刊本・備要本作「榮枯」、注云一作盈虛。梁文紀作「榮枯」、注云榮枯作盈虛。四庫本作「榮枯」。
- 五「任放」、叢刊本・備要本注云一作放蕩。
- 六「於」、叢刊本・備要本作「于」。
- 七「人間」之下、四庫本有「哉」字。

【書き下し文】

夫れ自ら衒ひ自ら媒するは、士女の醜行なり。伎はず求めざるは、明達の用心なり。是を以て聖人は光を韜め、賢人は世を遁る。其の故は何ぞや。徳を含むの至りは、道に踰ゆるは莫く、己を親しむの切なるは、身より重きは無し。故に道存して身安く、道亡はれて身害せらる。百齡の内に処り、一世の中に居るに、倏忽たること之を白駒に比し、寄寓すること之を逆旅と謂ふ。宜しきかな、大塊と与に盈虚し、中和に随ひて任放たり。豈に能く戚戚として憂畏に勞れ、汲汲として人間に役せられんや。

【語釈】

「自衒自媒者、士女之醜行」「自衒自媒」は、自ら才能を誇って売り込み、容貌を自慢して相手を求めること。曹植「求自試表」(『文選』卷三十七)に「夫れ自ら衒ひ自ら媒するは、士女の醜行なり。時を干め進むを求むるは、道家の明忌なり(夫自衒自媒者、士女之醜行。干時求進者、道家之明忌也)」とある。

「不伎不求者、明達之用心」「不伎不求」は、『毛詩』邶風・雄雉に「百爾の君子、

徳行を知らず。伎はず 求めず、何を用て蔵からざらん(百爾君子、不知徳行。不伎不求、何用不蔵)とあり、『毛伝』に「伎は、害なり(伎、害)」とある。また、『論語』子罕篇に「不伎不求、何用不蔵。子路終身誦之。子曰、是道也、何足以蔵(伎はず 求めず、何を用て蔵からざらん。子路 終身 之を誦す。子曰はく、是の道や、何ぞ以て蔵しとするに足らん)」とある。「明達」は事理に通じた人。謝靈運「山居賦」(『宋書』謝靈運伝)に「明達の運を撫するを覽るに、機の絨づるに乗じて理として黙す(覽明達之撫運、乘機絨而理黙)」とある。「用心」は心の用い方、心配り。潘岳「籍田賦」(『文選』卷七)に「固に堯湯の用心にして、存救の要術なり(固堯湯之用心、而存救之要術也)」とある。

「聖人韜光、賢人遁世」「韜光」は光を収める。「韜」は、収める、隠す。謝朓「齊敬皇后策文」(『文選』卷五十八)に「先徳は光を韜めるも、君道は方に被ぶ(先徳韜光、君道方被)」とあり、その李善注に「広雅に曰はく、韜は、蔵なりと(広雅曰、韜、蔵也)」とある。謝朓の例は、齊の明帝蕭鸞がまだ帝位につかず西昌侯であった時のことを言っており、「韜光」とは、光や輝きがまだ現れていないことを意味する。また孔融「離合作郡姓名字詩」(『古文苑』卷八)に「玫瑰 曜を陰ひ、美玉 光を韜む(玫瑰陰曜、美玉韜光)」とある。この例では、玉の輝きがなくなることと言う。この序では「光」は才能を表し、聖人がその才能を隠すことを言っていると考えられる。そのような例は『高僧伝』(『太平御覧』卷六五六引)に「積僧同、光を韜め迹を晦まし、人能く知るもの莫し(積僧同、韜光晦迹、人莫能知)」とある(積僧同については不明。『御覧』が前後に引く僧は、積慧皎『高僧伝』に記されているが、積僧同についての記述は『高僧伝』にない)。「遁世」は、世を逃れる。隠遁する。「遁」は「遜」に同じ。『周易』大過卦辞象伝に「君子以て独立して懼れず。世を遜れて悶ること無し(君子以獨立不懼。遜世无悶)」とある。『文選』には「遜世之士」という言い方が、嵇康「琴賦」(卷十八)、陸機「演連珠」(卷五十五)にある。

「含德之至、莫踰於道」「含德」は、徳を備えていること。『老子』第五十五章に「徳を含むの厚きは、赤子に比す（含徳之厚、比於赤子）」とある。「至」は極地、極点。『孟子』離婁篇上に「規矩は方員の至りなり。聖人は人倫の至りなり（規矩方員之至也。聖人人倫之至也）」とあり、その趙岐注に「至は、極なり（至、極也）」とある。「徳」と「道」については、『莊子』天地篇に「道を執る者は徳全く、徳全き者は形全し（執道者徳全、徳全者形全）」とある。

「親己之切、無重於身」「親己」は、自分自身を大切にすること。『列子』黄帝篇に「己を親しむを知らず、物を疎んずるを知らず、故に愛憎無し（不知親己、不知疎物、故無愛憎）」とある。「切」は、要。重要なこと。楊雄「長楊賦」(『漢書』揚雄伝下)に「請ふ 略凡を挙げん、客自ら其の切なるを覽よ（請略挙凡、而客自覽其切焉）」とあり、顔師古注に「切は、要なり（切、要也）」とある。

「処百齡之内」「百齡」は百歳、人の寿命を表す。「古詩十九首」(『文選』卷二十九)に「生年 百に満たざるに、常に千歳の憂ひを懐く（生年不滿百、常懷千歲憂）」とある。また、陶淵明「擬古」詩(『其二』)に「学ばず 狂馳の子の、直だ百年の中に在るのみなるを（不学狂馳子、直在百年中）」とある。

「居一世之中」「一世」は、人の寿命を表す。「古詩十九首」(『其四』) (『文選』卷二十九)に「人生 一世に寄り、奄忽として麤塵の若し（人生寄一世、奄忽若麤塵）」とある。また『史記』留侯世家にも「人生二世の間」とある。(後掲「白駒」注参照。)

「倏忽比之白駒」「倏忽」は速やかなこと。樂府古辭「長歌行」(『文選』卷二十八)に「茲の物 苟に停め難く、吾が寿 安くんぞ延ぶるを得ん。俛仰に逝きて將

に過ぎんとし、倏忽にして幾何の間ぞ（茲物苟難停、吾寿安得延。俛仰逝將過、倏忽幾何間）」とある。「白駒」は、白馬。人の一生が速やかに過ぎ去ってしまうことを白馬がわずかな隙間を駆け去ることに例える。『莊子』知北游篇に「人の天地の間に生まるるや、白駒の卻を過ぐるが若く忽然たるのみ（人生天地之間、若白駒之過卻忽然而已）」とある。また『史記』留侯世家にも「呂后 留侯を徳とし、乃ち強ひて之に食はしめて曰はく、人生一世の間、白駒の隙を過ぐるが如し。何ぞ自ら苦しむこと此くの如きに至るやと（呂后徳留侯、乃強食之曰、人生一世間、如白駒過隙。何至自苦如此乎）」とある。『莊子』知北游篇の釈文には、日とする説をあげるが、今はとらない。穆克宏・郭丹西氏は日の方をとり、一説に白馬と注する。

「寄寓謂之逆旅」「寄寓」は、仮の宿り。『国語』周語中に「国に寄寓無く、泉に施舎無し（国無寄寓、泉無施舎）」とあり、高誘注に「寓も亦た寄なり。寄寓無しとは、廬舎の、以て羈旅の客を寄寓すべきを為らざるなり（寓、亦寄也。無寄寓、不為廬舎、可以寄寓羈旅之客也）」とある。『国語』の例では旅人の宿の意味であるが、この序では人生になぞらえて言っている。「寄」については、「古詩十九首」(『其三』)に「人生天地間、忽如遠行客（人の天地の間に生まるるは、忽として遠行の客の如し）」とあり、その李善注に「『尸子』に老萊子曰はく、人の天地の間に生まるるは寄なり。寄する者は固より帰るなり（『尸子』老萊子曰、人生於天地之間寄也。寄者固帰）」とある。前掲「一世」の例として引いた「古詩十九首」(『其四』)にも「寄」字が使われている。「寓」については、陶淵明「歸去來兮辭」に「形を宇内に寓すること復た幾時ぞ、曷ぞ心を委ねて去留に任せざる（寓形宇内復幾時、曷不委心任去留）」とある。二字は校勘に示す通りもと「寄遇」に作る。兪紹初氏は字句は改めず、注に寓と遇は通用すると述べるが、このたびの訳注では、『国語』高誘注にもあるように、「寄」と「寓」は似通った意味であり、二字のつながりが密であると判断し、他本によって改めた。「逆旅」は旅籠、旅館の意。『春秋左氏伝』僖公二年に「今 虢、不道を為し、逆旅に保んず（今虢為不道、保於逆旅）」とあり、

杜預注に「逆旅は客舎なり（逆旅、客舎也）」とある。この序では、「寄寓」と同じく人生になぞらえている。そのような例は、陶淵明「雜詩」〈其七〉に「家は逆旅の舎為り、我は当に去るべきの客の如し（家為逆旅舎、我如去客）」とあり、「自祭文」〈序〉に「陶氏 將に逆旅の館を辞し、永く本宅に帰らんとす（陶氏將辞逆旅之館、永帰于本宅）」とある。この世での「生」が仮住まいで、「死」によって本来の家に帰っていくという考えである。

〔与大塊而盈虚〕「大塊」は、大地のこと。『莊子』齊物論篇に「夫れ大塊の噫氣は、其の名を風と為す（夫大塊噫氣、其名為風）」とあり、大宗師篇に「夫れ大塊は我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てす（夫大塊載我以形、勞我以生）」とある。穆克宏・郭丹両氏、温洪寿氏は出典をあげないが自然のことと解す。熊永謙氏は齊物論篇を引き、俞紹初氏は大宗師篇を引き、ともに『莊子』本文の引用に続けて、齊物論篇の成玄英疏「大塊とは、造物の名、亦た自然の称なり（大塊者、造物之名、亦自然之称也）」を引く（大宗師篇でも「大塊者、自然也」と言う）。高歩瀛氏は齊物論篇本文のみを引く。ほかに用例としては、郭璞「江賦」〔『文選』卷十二〕に「大塊の形を流し、万を混じて一科に尽くすを煥す（煥大塊之流形、混万尽於一科）」とあり、李善注は『莊子』齊物論篇と司馬彪注「大塊は、自然なり（大塊、自然也）」を引く。一方、大地との解釈については、俞氏は別解としてあげ、俞樾の説を参照するように言う。俞樾は「大塊とは、地なり……（大塊者、地也……）」と述べる。ほかに用例としては、張華「答何劭」詩二首〈其二〉〔『文選』卷二十四〕に「洪鈞は万類を陶し、大塊は郡生を粟く（洪鈞陶万類、大塊粟郡生）」とあり、李善注は「大塊は地を謂ふなり（大塊謂地也）」と言ひ、『莊子』大宗師篇を引く。俞樾は、齊物論篇の前後から大地と解すべきことを述べており、訳注者もそのように考える。また訳注者は大宗師篇についても「載我」というところから大地のことと考える。「大塊」の語は陶淵明にもあり、「感士不遇賦」に「咨大塊の氣を受け、何ぞ斯の人の独り靈なる（咨大塊之受氣、何斯人之独靈）」とあ

り、「自祭文」に「茫茫たり 大塊、悠悠たり 高旻（茫茫大塊、悠悠高旻）」とある。陶淵明の用例についても注釈書によって解釈が異なるが、訳注者はこれも大地との解釈をとる（以上の成玄英疏と俞樾の説は、郭慶藩『莊子集釈』による）。「盈虚」は、時には満ち時には空になるという変化をいう。『周易』豊卦彖伝に「日中すれば則ち辰き、月 盈つれば則ち食く。天地の盈虚、時と与に消息す。而るを況んや人に於てをや。況んや鬼神に於てをや（日中則辰、月盈則食。天地盈虚、与时消息。而況於人乎。況於鬼神乎）」とある。校勘に示すように「榮枯」に作るものもあるが、「榮枯」も時には榮え時には枯れるという変化をいう。

〔随中和而任放〕「中和」は、偏らない正しい気で、万物を育む。『礼記』中庸篇に「喜怒哀楽の未だ発せざるを之を中と謂ふ。発して皆節に中るを之を和と謂ふ。中なる者は、天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致せば天地は位し、万物は育す（喜怒哀楽之未発謂之中。発而皆中節謂之和。中也者、天下之大本也。和也者天下之達道也。致中和天地位焉、万物育焉）」とある。また、王粲「迷迭賦」〔『芸文類聚』卷八十一引〕に「中和の正氣を受け、陰陽の靈休を承く（受中和之正氣兮、承陰陽之靈休）」とある。また『白虎通』社稷篇にも「陰陽中和の氣を得（得陰陽中和之氣）」とある。『文選』にも、馬融「長笛賦」（卷十八）に「各得おの其の齊を得、人 欲する所を盈す。皆 中和に反り、以て風俗を美にす（各得其齊、人盈所欲。皆反中和、以美風俗）」とあり、任昉「為蕭揚州薦士表」（卷三十八）に「神は清み氣は茂んに、允に中和を迪む（神清氣茂、允迪中和）」とある。なお、穆克宏・郭丹両氏は、リズムであり、法則を指すと注す。「任放」は、あるがままで、のびのびとしたさまを言う。「任」はなるがまま、「放」はほしいままの意。熟語としては『世説新語』德行篇に「王平子・胡母彦国の諸人は皆任放を以て達と為し、或いは裸体なる者有り（王平子胡母彦国諸人皆任放為達、或有裸体者）」とある。校勘にあるように「放蕩」に作るテキストもあるが、意味は同じであろう。曹植「七啓」〔『文選』卷三十四〕に「情は放に志は蕩し、淫楽 未だ終は

らず（情放志蕩、淫樂未終）」とあり、気持ちをのびのびとさせるところで、「放」
「蕩」が使われている。

などないのだ。

【戚戚勞於憂畏】「戚戚」は、憂えるさま。『論語』述而篇に「子曰はく、君子は坦
蕩蕩、小人は長戚戚なり」とあり、『集解』の引く鄭玄注に「長戚戚は憂懼多し（長戚戚多憂懼）」とある。「憂畏」は、憂いや
畏れ。『論語』鄭注の「憂懼」に同じ。

【汲汲役于人間】「汲汲」は、あくせくとすること。『漢書』揚雄伝に「富貴に汲汲
たらず、貧賤に戚戚たらず（不汲汲於富貴、不戚戚於貧賤）」とあり、顏師古注に
「汲汲は、欲速の義なり（汲汲、欲速之義）」とある。陶淵明「五柳先生伝」に
「黔婁言へる有り、貧賤に戚戚たらず、富貴に汲汲たらずと。其れ茲れ若き人の
儔を言ふか（黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴。其言茲若人之儔乎）」とあ
る。

【和訳】

そもそも自ら才能を誇って売り込み容貌を自慢して相手を求めるのは、男女の醜い行
いである。人に害を与えずむさぼり求めることをしないのは、道理に通じた者の心の
用い方である。そこで聖人はその才能を隠し、賢人は隠遁する。それはなぜである
う。徳を備えることの極点は、道に従う以上のもはなく、自分を大切にすることの
肝要は、身体よりも重要なものはない。よって道があれば身体は安らかであり、道が
失われると身体は損なわれるのである。人生百年、一世に身を置くと、速やかである
ことを白馬が隙間を駆け去るさまになぞらえ、（この世での）仮住まいを旅人を迎え
る旅館（のようなもの）であると言う。もっともなことよ、大地の変化とともに変化
し、万物を育む中和の気のままにのびのびとしているのは。どうしてよくよと憂い
や畏れに疲れ、あくせくとこの世で努め励まなければならないだろうか、そんな必要